

看護師の社会的スキルの現状

橋本結花

高知大学医学部看護学科 〒782-8505 高知県南国市岡豊町小蓮

The present status of social skills in nurses working in general hospitals

Yuka Hashimoto

Kochi Medical school Faculty of Nursing.

Kohasu, Oko-cho, Nankoku City, Kochi(783-8505), Japan

要約

本研究の目的は、看護師の社会的スキルの現状を明らかにすることである。看護師の社会的スキルの測定には、菊地が作成した社会的スキル尺度 (KISS-18) を用い、自記式質問紙調査を行なった。その結果、社会的スキルは年齢、看護師経験年数と有意な相関が認められた。しかし、最終学歴の違いからの4群間（「専修・各種学校卒業」「高等学校専攻科卒業」「短期大学卒業」「大学卒業・大学院修了」）では、有意な差は認められなかった。

Abstract

This study examined the present status of social skills in nurses working in Shikoku by a questionnaire survey using the social skill index developed by Kikuchi (KISS-18). It was found that social skills were significantly correlated with age and the number of years working as a nurse. However, there was no significant difference in social skills between four groups based on the final academic records obtained from special training schools or other vocational schools, specialized courses at high schools, junior colleges, or universities or graduate schools.

キーワード：看護師 社会的スキル

Key Words: Nurse, Social-Skill

はじめに

医療を取り巻く環境が日々変化する今日、社会からは質の高い看護が求められている。その質の高い看護を提供するため、臨床の看護師に求められる能力には様々なものがあるが、本研究ではその中でも看護師の持つコミュニケーション能力に注目した。研究にあたり、コミュニケーション能力を実践レベルの社会的スキルと捉え、その現状を明らかにすることで、今後の継続教育のあり方や教育プログラムへの示唆を得たいと考えた。

目的

本研究の目的は、看護師の社会的スキルの現状を明らかにし、新たな継続教育プログラム作成の基礎資料とすることである。

研究方法

1. 用語の操作的定義

本研究においては社会的スキルを、「対人関係を円滑に進める具体的行動」と定義した。

2. 研究デザイン

質問紙法でデータを収集する量的研究デザイン

3. 研究対象

対象者選定にあたっては、無作為に選んだ四国4県（香川県、徳島県、愛媛県、高知県）の総合病院の所属施設長及び看護部長に、研究依頼書や使用する質問紙を送付した。研究依頼を16施設に送付し、10施設（独立行政法人国立病院機構や公立の総合病院6施設、私立の総合病院4施設）から協力が得られるとの回答を得た。本研究では、この研究協力の得られた総合病院に勤務する看護師674名を対象とした。

4. 調査期間

2004年6月10日～2004年8月12日

5. 調査方法

協力が得られた施設の看護部長または教育や研究の担当者に、質問紙の配布を一任した。個別の封筒に、研究の主旨、プライバシーの保護等の説明文を添えた自記式無記名質問紙を入れた。封筒には、返信用封筒を同封し、郵送法での回収とした。

6. 測定用具

社会的スキル測定には、菊池¹⁾が作成した社会的スキル尺度（KISS-18）を使用した。尺度の使用にあたっては、文書にて尺度使用の許可を得た。

他に、性別、年齢、看護師経験年数、最終学歴の属性を加え質問紙を作成した。

7. 分析方法

記述統計量を求めた上で、分析を行なった。分析には、Kolmogorov-Smirnov の1サンプル検定、Kruskal Wallis 検定、Bonferroni の修正による多重比較、Spearman の順位相関係数を用いた。欠損値の扱いは、基礎統計量や要因間の相関時はペア毎に欠損値の処理を行い、Kruskal Wallis 検定時には、リストごとに除外する作業を行った。統計ソフトは、SPSS Base 11.5J for Windows を使用した。

8. 倫理的配慮

倫理的配慮として、研究の目的、方法、研究への協力の有無により不利益が生じないこと、得られた結果は適正に管理すること、不明点の問合せ先等を全対象者に文書で添付した。質問紙は無記名で回収し、個人や施設が特定されない旨も明記した。回収には個別の封筒を用意し、プライバシーを保護するようにした。さらに、研究への自由参加の意思を最大限尊重するため、郵送法での回収とした。

結果

1. 対象者の背景

対象者 674 名のうち 396 名から回答を得た。回収率は 58.7%であった。このうち、基本属性の記入が不備なものや、回答の記載が無い質問紙 23 名分を除外し、予備調査で得られたものをあわせ、386 人を分析対象とした。性別は、男性 13 名 (3.4%)、女性 373 名 (96.6%) であった。男性からの回答が少数であったため、男女を分けずに分析を行った。年齢の平均は、 37.3 ± 9.3 歳、経験年数の平均は 14.6 ± 9.0 年であった。(表 1)。

表 1 対象者の基本属性

N=386

基本属性	人数 (%)	平均値±SD	最小値	最大値	範囲
性別					
男性	13 (3.4)				
女性	373 (96.6)				
年齢		37.3 ± 9.3	21	61	40
経験年数		14.6 ± 9.0	0.17	38	37.83
最終学歴					
①専修・各種学校	291 (75.4)				
②高等学校専攻科	27 (7.0)				
③短期大学 (2年・3年課程)	26 (6.7)				
④大学	26 (6.7)				
大学院	3 (0.8)				

2. 尺度の信頼性・妥当性

社会的スキル尺度の得点分布の正規性を確認するために、合計得点をグラフ化し、さらに Kolmogorov-Smirnov の 1 サンプル検定を行った。Kolmogorov-Smirnov の 1 サンプル検定では、分布の差がみられた。Cronbach's alpha 係数は、0.89 であった。また、項目と尺度全体の合計得点では、18 項目全てにおいて 1% 有意水準で相関が認められた。

3. 社会的スキル尺度の得点

社会的スキル尺度の合計得点の平均は、58.58、標準偏差は 8.77 であった。社会的スキル尺度の各項目の得点平均及び標準偏差は、表 2 のようになった。

表 2 社会的スキル尺度の各項目平均値および SD N=386

社会的スキル尺度	平均値	SD
①他人と話していて、あまり会話が途切れない方ですか	3.28	0.88
②他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか	3.16	0.85
③他人を助けることを上手にやれますか	3.38	0.76
④相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか	3.22	0.75
⑤知らない人とでも、すぐに会話が始められますか	3.08	1.07
⑥まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか	3.03	0.76
⑦こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか	3.09	0.74
⑧気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか	3.08	0.85
⑨仕事をするとき、何をどうやったらよいか決められますか	3.73	0.73
⑩他人が話しているところに、気軽に参加できますか	3.14	0.89
⑪相手から非難されたときにも、それをうまく片付けられますか	3.07	0.74
⑫仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか	3.24	0.76
⑬自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか	3.22	0.95
⑭あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか	3.16	0.74
⑮初対面に人に、自己紹介が上手にできますか	3.14	0.88
⑯なにか失敗した時に、すぐに謝ることができますか	3.99	0.76
⑰まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていけますか	3.56	0.70
⑱仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか	3.11	0.94

4. 社会的スキル尺度と年齢

社会的スキル尺度と年齢では、1%の有意水準で相関が認められた (表 3)。また、年齢を 20 代前半から 50 代以上の 7 群に分けたもの (表 4) での得点差では、20 代と 40 代以上の年齢によって有意な差が認められた (表 5.6)。

表 3 社会的スキル得点と年齢の相関 N=386

尺度	年齢との相関	
社会的スキル尺度合計得点	0.187	**
Spearman の順位相関係数		** P<0.001

表4 対象者の年齢と経験年数

N=386

群	人数 (n)	平均年齢±SD	平均経験年数±SD
1 20代前半	40	23.9±1.3	2.6±1.5
2 20代後半	74	28.1±1.5	6.3±2.2
3 30代前半	66	33.1±1.4	11.0±2.9
4 30代後半	72	38.4±1.4	15.5±3.8
5 40代前半	49	43.0±1.4	19.9±4.3
6 40代後半	46	48.0±1.3	23.7±5.3
7 50代以上	39	54.1±2.3	29.4±4.7

表5 年齢による社会的スキル合計得点の比較

N = 386

	20代前半		20代後半		30代前半		30代後半		40代前半		40代後半		50代以上		統計量
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
合計得点	54.98	7.31	57.42	9.17	58.80	8.20	57.89	9.20	59.94	7.64	60.22	9.75	61.69	8.38	.003*

Kruskal Wallis 検定

* P<0.05

表6 社会的スキル合計得点 年齢による多重比較

	20代前半	20代後半	30代前半	30代後半	40代前半	40代後半	50代以上
20代前半		.183	.011	.096	.000*	.002*	.000*
20代後半			.235	.623	.047	.167	.005*
30代前半				.471	.517	.676	.068
30代後半					.151	.361	.016
40代前半						.814	.216
40代後半							.212
50代以上							

Bonferroniの修正による多重比較

* P<0.0071

5. 社会的スキル尺度と経験年数

社会的スキル尺度と経験年数では、1%の有意水準で相関が認められた(表7)。続いて、経験年数を5年以下から26年以上の6群(表8)に分け、その差を検討した。その結果、この6群においては有意の差は認められなかった(表9)。

表7 社会的スキル得点と経験年数の相関

N=376

尺度	経験年数との相関	
社会的スキル尺度合計得点	0.182	**

Spearmanの順位相関係数

** P<0.001

表 8 対象者の経験年数 N=376

	群	人数 (n)	平均年齢±SD
1	5年以下	73	3.18±1.59
2	6年～10年	77	8.09±1.54
3	11年～15年	57	13.07±1.28
4	16年～20年	72	17.99±1.52
5	21年～25年	47	23.30±1.58
6	26年以上	50	29.94±2.58

表 9 経験年数による社会的スキル合計得点の比較 N = 376

	5年以下		6年～10年		11年～15年		16年～20年		21年～25年		26年以上		統計量
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
合計得点	7.42	4.00	7.53	1.15	7.65	1.14	7.51	1.18	7.72	1.21	7.54	1.09	.785

Kruskal Wallis 検定

*P<0.05

6. 社会的スキル尺度と最終学歴

最後に、社会的スキル尺度と最終学歴の検討を行なった。分析にあたり、最終学歴の専修・各種学校卒業者が圧倒的に多かったため、分析への影響を考慮し、最終学歴を①専修・各種学校卒 291 人、②高等学校専攻科卒 27 人、③短期大学（2 年課程と 3 年課程）卒 26 人、④大学卒・大学院修了 29 人の 4 群に分けた（表 1）。その結果、最終学歴の違いでは社会的スキルの得点に有意な差は認められなかった（表 10）。

表 10 最終学歴における社会的スキルの得点 N=373

	専修・各種学校 (n=291)		高等学校専攻科 (n=27)		短期大学 (n=26)		大学・大学院 (n=29)		統計量
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
合計得点	58.04	8.66	60.04	6.08	60.23	9.53	61.48	9.97	.109

Kruskal Wallis 検定

*P<0.05

考察

1. 対象者の概要について

質問紙は郵送法で回収したにもかかわらず、396 名からの回答があり、58.7%という回収率は良好と考える。多数の回答が得られたという点から、本研究の信頼性や妥当性が高まると考える。対象者の性別は女性が、最終学歴では専修・各種学校卒業者が圧倒的に多かった。今後、男性看護師の増加や多様な最終学歴、資格や免許をもった看護師の増加が予測され、社会的スキルの違いは更なる調査が必要と思われる。

2. 尺度の信頼性及び妥当性

Kolmogorov-Smirnov の 1 サンプル検定では、合計得点において分布の差はみられなかった。そのため、社会的スキル尺度の合計得点には正規性があると考えられる。Cronbach's alpha 係数は 0.89 であり、信頼性は高いと考えた。また、項目と尺度全体では、18 項目すべてにおいて、1% 有意水準で相関があり、内的整合性があると判断した。

3. 社会的スキルの得点

看護師は人間関係を基盤として病む人を援助する専門職であり、人と相互作用を持ちながら問題を解決していく能力が求められる。野崎²⁾は、看護学部、総合政策学部、ソフトウェア情報学部、社会福祉学部の学生に対し、本研究と同じ社会的スキル尺度 (KiSS-18) を用い調査を行なっている。その結果、看護学部が他学部に対し、有意に高い値を示した。本研究は看護師のみを対象に調査を行なったが、看護師は社会的スキルが比較的高い集団であると予測される。しかし、「社会的スキル」は、文化との結びつきが深い³⁾。アメリカなどの欧米諸国では、自分の意思をはっきりもち、他者の前で堂々と主張できるようなスキルを持つことに価値がおかれる。これに対し、日本のような社会では他者に対して剥き出しの自己表現をせず、誰にでも好ましい印象を与えるスキルが、社会的に適切な行動を生む基盤になっていると考えられる。将来は、社会的スキルの変化が予測され、文化に固有な側面にも目を向けていく必要があると考えられる。

4. 社会的スキルと年齢

社会的スキル得点は、年齢との相関が認められた。看護師の年齢が高いほど、社会的スキルも高くなる傾向があることが明らかになった。先行研究では、社会的スキルは年齢と正の相関があると言われている⁴⁾。本研究でも、同様の結果が得られた。また、年代による得点の差の検討では、20 才代前半と 40 才前半以上の群で有意の差が見とめられた。また、20 代後半と 50 代以上の間でも有意の差が認められた。古畑⁵⁾は、様々な社会的活動に積極的に参加し、それを好むようになることが、社会的態度を発達させると述べている。20 才代は、まだ社会的な活動の経験が乏しい。そのため、若年層では社会的スキル得点が低く、40 才以上の人生の経験も豊かな高年齢の層は、得点が高くなったのではないかと考える。免田ら⁶⁾は、一社会人としての看護師が一社会人である対象に対して、その人の尊厳に限りない敬意をはらい、自己をコントロールしながら信頼関係を築くことができる対人能力が看護実践に求められるとしている。臨床の現場や継続教育では、特に 20 才代の看護師の社会的スキルをサポート、向上させるような取り組みが必要であると考えられる。

5. 社会的スキルと経験年数

社会的スキル得点と経験年数は、有意の相関が認められた。これは、経験年数上昇に伴い、社会的スキルも高くなる傾向があることを示している。前述しているように、社会的スキルは、年齢と正の相関がある。臨床経験年数と年齢の相関 (ピアソンの積率相関係数) は、0.92 と非常に高い。そのため、人間としての社会経験、看護師としての社会経験が、スキルの得点に繋がっていると考えられる。

6.社会的スキルと最終学歴

最終学歴から社会的スキルを比較したが、①専修・各種学校卒、②高等学校専攻科卒、③短期大学（2年課程と3年課程）卒、④大学卒・大学院修了の4群では、その社会的スキル得点に有意な差は認められなかった。社会的スキルの概念は、知能、パーソナリティ、言語、非言語行動、認知などの概念を基礎として、その上に成り立つ複雑で豊富な内容を持った概念と言われている⁷⁾。社会的スキルは様々な要因によって変化すると考えられるが、本研究の結果からは、年齢や経験年数の上昇と共に成長する傾向にあるが、最終学歴によつての差は認められないと考える。

結論

- 1、看護師の社会的スキルは、年齢及び看護師経験年数と高い相関が認められた。
- 2、看護師の社会的スキルにおいて、年代による得点の差の検討では、20才代前半と40才前半以上の群で有意の差が見とめられた。
- 3、最終学歴では、看護師の社会的スキルにおいて有意な差は認められなかった

引用文献

- 1) 菊地章夫：Kiss-18研究ノート,岩手県立大学社会福祉学部紀要,6(2),41-51,2004.
- 2) 野崎智恵子他：看護大学生の社会的スキル,日本看護学会論文集,看護教育,74-76,1999.
- 3) 菊地章,堀毛一也：社会的スキルの心理学,204,川島書店,1994
- 4) 前掲書3)
- 5) 古畑和孝：社会性とは,教育と医学,37(9),820-827,1997.
- 6) 免田紀子,金川治美：看護実践能力としての基礎となる看護技術のとらえかた,看護実践の科学,69-72,2001.
- 7) 相澤充：人づきあいの技術 社会的スキルの心理学,サイエンス社,2003,東京

(受理日 2006年12月1日)